

今回、とても多くの方が「たまたま」という言葉を使っていたのが印象的でした。多くの方は、読書をつうじて、日本とまったく異なる環境下で生きる人たちのことを知り、私たちは「たまたま」日本に生まれたのだと気づきます。食べるものに困ることはなく、学校にいけない、女の子だからってとくべつな分け隔てをされることはない、それはみんな、「たまたま」なのだ、と。

十河勇輝さんは、「女性が輝く世界で」という感想文で、女性差別について考え、日本にもまだ問題はあるのではないかと考えます。女性差別をなくすには男性の協力が不可欠だという意見に私も同意します。

「女の子だから」を書いた渡邊愛良さんは、同じ問題について、自分が「お姉さんだから」と言われて窮屈な思いをしていたことを思い出して、理解しようとしています。女だから、〇〇だから、という理由が偏見のもとであるという考えにたどり着き、そこから、今の日本社会にも思いを馳せています。

バレエダンサー、ミケーラ・デプリンスの著作を読み「幸せなこと」を書いた山田理恵さんは、その著作をわかりやすく紹介しながら、どんな環境下であろうと、人はやりたいことに全力を打ちこめるならば幸せになれると書きました。それはその人の存在意義にもなり、だれかの光にもなる。好きなことをすることで、人は救われるのだという視点がすてきだなと思いました。

松浦果音さんが「教育によって夢を実現させる」で書いた教育の重要性は、私もずっと考えていることです。松浦さんは、自分に今何ができるかを考えて、勉強だという結論を出します。すごくただしくて、まっとうなことだと思い、松浦さんのこの先を応援したくなりました。

仲井壯汰さんは、「私は女の子だから」を読み、驚きから怒りへと感情を変えていきます。現状を変えられるのは何か、ということを考えて仲井さんが出した答えは、シンプルだけれど、とても大事なことです。私たちが大人でも子どもでも、どこの国に生きていても、今、すぐに、実践できることだからです。

八木悠馬さんは「マラスが教えてくれたこと」のなかで、ホンジュラスのギャング団が、自分とはあまり関係のない遠い異国の存在だとはせず、ギャング団に入っていく少年たちの気持ちに寄り添い、そして、日本に暮らす私たちとの共通点に気がつき、そこから思考を深めます。特定の宗教を持たないことが多い日本人のほうが、信仰心を持つ人たちより危ういのではないかという指摘は鋭く、説得力があります。力強い感想文に私も励まされた気持ちになりました。

自分が今いる環境や場所や状況について、「たまたま、女性差別がそう激しくない場所に生まれた」「たまたま義務教育をだれもが受けられる場所に生まれた」「たまたま飢餓を知らなくてすむ環境に生まれた」、そう気づくことは、本当に重要なことだと今回思わされました。ここにいるのは「たまたま」なんだ、と知ることは、もっと過酷な場所に、想像もし得ない状況にいる人たちも、「たまたま」そこにいると気づくことです。そのことに気づかなければ、同じ時代を、違う環境、違う場所で生きている人に思いを馳せることはできません。自分以外のだれかの気持ちになってみる。感想文のタイトルにもありましたが、思いやる。遠い国の人でもいいし、同じクラスの隣の席の人でもいい、他者を思いやる、そこからはじまる力がどれほど大きなものになるか、みなさんの感想文を読んで、あらためて考えさせられました。

岡田光七